

2025 年度 中東☆イスラーム研究セミナー（第 26 回）

日時：2025 年 12 月 19 日～2025 年 12 月 21 日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「私の博士論文（と博士課程）」

黒沼太一（AA 研）

本報告では、中東地域の考古学を専門とする報告者の博士論文作成と博士課程研究への取り組みを紹介し、イスラーム研究に限らず人文系の博士課程学生による博士論文研究に資することを目的とした。そのため、考古学に関する事項は必要に応じて扱うに留め、博士論文の計画、その実現のために博士課程をどのように過ごしたか、および学位取得後の状況に焦点を当て、「どのような博士論文だったか」、「博士課程ではどのように過ごしたか」、「ポストクの状況について」の 3 つの構成に分けて報告者の経歴を適宜挟みながら報告した。

「どのような博士論文だったか」では、博士論文の概要・意義を述べた。中東地域に関する研究に通底する問題点を考古学的観点から言及したのち、古い調査資料を新しい知見に基づいて再考することが持つ学術的意義を述べた。特に様々な博物館収蔵資料・アーカイヴ資料がある中で各種類の資料が持つ特性を理解し、何が可能で何が不可能か実行可能性を探りつつ、研究の計画と目的の設定、章立てを構築することが必要である旨を紹介した。

上記を踏まえ、「博士課程ではどのように過ごしたか」では、博士論文研究を行うために実施した、分析のためのデータ収集・研究内容のアウトプット（国際会議への参加・論文執筆）などに言及した。また同時に、この内容と不可分になる研究を推進するための資金調達に関する状況も紹介した。特に、継続的に国際会議へ参加することの重要性を述べ、国際会議は単なる研究発表の場だけでなく、発表内容をもとにした論文作成など、博士課程の段階から英語業績の積み上げに効率的に寄与する機会であること、さらに同世代の若手を含む欧州などの研究者とのネットワーキングに繋がり、学位取得後を見据えた共同研究の素地を築く機会となることを挙げた。また博士課程中にも博士論文研究とは異なる対象・地域のフィールド調査に参加することで視野を広げ、自分自身の研究の裾野を広げることが将来的に新たな研究の展開・キャリアの構築へと繋がることにも触れた。

「ポストクの状況について」では、学位取得後の状況について述べた。報告者のポストク期間は大部分が新型コロナウイルス感染症の世界的流行と重なり、当初の学振 PD 計画に基づく博物館での調査やフィールドワークが実行不可能な中で、博士課程在籍中から取り組んでいた調査で取得したデータの整理と論文の執筆や、オンライン国際会議への重点的な参加により研究を推進したことを報告した。また従前から複数のフィールド調査に参加していたことが幸いし、世界的な緊急事態や不安定な現地情勢にあっても研究活動を継続可能だったことに触れ、博士論文研究を支柱としつつも、博士課程中から多角的な研究活動を意識することの重要性を述べた。